ドイツ連邦共和国　　派遣期間　2013 年 4 月～2016 年 3 月

ベルリン日本人国際学校　帰国報告

～ドイツに見た持続可能な社会の構築～

帯広市立緑園中学校
教　諭　多田　明寿

１．ドイツ連邦共和国

(1)　ドイツについて

黒　勤勉

赤　情熱

金　名誉

正式名称：Bundesrepublik　Deutschland
ドイツ連邦共和国

首都：Berlin　ベルリン

国旗：黒・赤・金の横三色旗

国の紋章：様式化された鷲

国歌：歌詞はアウグスト・ハインリヒ・ホフマン・フォン・ファラースレーベンによる「ドイツ人の歌」第 3 節曲はヨーゼフハイドンの「皇帝」から

政体：16 の連邦州からなる連邦共和制先進 8 か国（Ｇ８）の一つ
フランスと並ぶ欧州連合（ＥＵ）の中核国

国土：人口 8136 万人（2015 年）面積３５万７千㎢（日本とほぼ同じ）

民族構成：91%がゲルマン系のドイツ語を母語とするドイツ民族
国内居住者の約 20%が外国人または両親の一方が外国人

宗教：キリスト教（63%）カトリックとプロテスタント半数ずつ
イスラム教（5%）など

言語：ドイツ語（公用語）

通貨：EURO（ユーロ）　€１＝１００セント

紙幣の種類は，５，１０，２０，５０，１００，２００，５００ユーロ。€100 以上はあまり流通していない。硬貨は，１，２ユーロと １，２，５，10，20，50 セントがある。

近年，ユーロと円の関係は変動が激しく，在任中はユーロ高，円安傾向にあったがこの度のイギリスＥＵ離脱に伴い，円高傾向に変わりつつある。

国民の祝日：(2015 年)

３月　２５日	受難の金曜日
３月　２６日２７日	復活祭
５月　１日	メーデー
５月　５日	昇天祭
５月　１５日	聖霊降臨祭
１０月３日	ドイツ統一記念の日
12 月 25 日 26 日	クリスマス
１月　１日	元旦

【ブランデンブルク門】

(2)　ベルリンについて

〈歴史・文化〉

「ドイツの首都」連邦州のうちの一つ。人口 350 万人で，ドイツ最大の都市。市域の三分の一は森林・公園・庭園・河川や湖で構成されており，大都会でありながら，街中に緑があふれている。

第二次世界大戦後，東西ドイツが分裂，ベルリンも東西に分かれ東側はソ連に，西側はアメリカ・イギリス・フランスの三国に統治された。

1989 年ベルリンの壁が開放。現在では，壁は取り壊され，一部が記念碑として残されている。2014 年は壁崩壊 25 周年であった。

【国会／連邦議会】

〈気候・風土〉

ベルリンの緯度は，サハリンの中央とほぼ同じであるが，偏西風による西岸海洋性気候で，比較的温暖である。日本で言えば，まさに北海道の気候に似ている。

緯度が高いため，日照時間の変化が大きい。夏は朝４時頃から夜１０時まで明るく，３月下旬から１０月下旬まで夏時間が導入されている。

春	気候が安定せず，気温が低くなって雪が降ったり，強い日差しでかなり気温が上昇したりすることがある。
夏	気温が 30 度を超えることもあるが，空気が乾燥しているため暑苦しさは感じない。(平均最高気温 22～25℃平均最低気温 12～14℃）陽射しは強烈で体感温度も高いが，日陰に入ると涼しい。(高原や，標高 2000m以上の山間部の気候に類似)
秋	10 月になると気温も下がり，日照時間も減る。紅葉の期間は短い。
冬	マイナス 10 度以下に下がることもあるが，長時間外に出ていない限り，耐えがたいほどの寒さではない。20ｃｍほどの降雪が見られる日もある。冬は朝 8 時頃まで夜が明けない上，夕方 4 時頃には暗くなる。

【緑が美しい通り】

【夏の湖水浴】

〈経済と治安〉

2013 年のベルリン市の GDP は 1092 億ユーロ。失業率は 2011 年現在 12.7%でドイツ平均の 6.6%に比べると高い数値であるが，ここ 15 年間では最低である。

犯罪率は日本より高く，首都ベルリンにおける１日の認知犯罪件数は約 1500 件～1600 件。市街中心部や観光スポットには，観光客をねらうスリや置き引きがいるので，十分注意が必要である。外国人排斥運動をしている者がいるほか，深夜の盛り場での傷害事件が発生しているため，夜間一人歩きをしないなど，最低限の危機管理も必要である。

〈難民問題について　２０１５年１２月段階において〉

ドイツはすでに数万人規模の難民の受け入れを決め，さらに 2015 年からの 3 年間に難民に対して更なる経済支援を約束したようである。そのことから，ドイツは今後も引

き続き難民を受け入れていくことが予想されている。現在ベルリン市内では難民の収容施設が数箇所存在している。例えばベルリンの旧テンペルホーフ空港は現在，難民数百人の収容施設となっており，日本人学校が水泳の授業を行っているプールに隣接する体育館も難民の収容施設となっている。現地の学校も就学児童を受け入れるなど，共存を心がけている。すでにメディアなどで伝えられている通り，難民に対して反対行動をする人も皆無では無い。そのためベルリンの各収容施設では，難民と住民がトラブルにならないように警備員を配置している。

２．ベルリン日本人国際学校

（１）概要と特色

「日本人国際学校」その名前が示すように，現地ベルリンの教育委員会にも学校として認可されている。また，本校の最大の特長は何といっても，現地校（コンラード校）の敷地内に校舎が併設されているということだろう。交流事業や行事はもちろん，日常の学校生活においても，ドイツ人の子供たちや教職員と触れ合えるということは，「生きた異文化理解」であった。それは良い面，時として悪い面としても，異文化の面白さを理解・経験することができた。

①個に応じた学習指導

全校の児童生徒数は，常に 30 数名を推移している。そんな中，個に応じた学習指導は本校の魅力ある学校創りの一つになっている。基礎基本の定着はもちろん，発展学習や課題解決学習にも力を入れており，受験を見据えた学力向上でも成果をあげている。

②学校行事や諸活動の充実

①と同じく少人数の特長を生かして，様々な取り組みが行われている。それについては，（２）で詳しく触れたいと思う。

③英語・ドイツ語力を高める

週 2 回，少人数レベル別英会話とドイツ語授業が行われている。本校で行っている英語検定では，小学校の段階から上位級（２級３級）取得者が多くいる。そして隣接する現地校や姉妹校との頻繁に行われる交流でそれらを生かし，実践的コミュニケーション能力を高めている。

④言語活動の充実

毎週行われるスピーチ朝会や年度末の学習発表会をはじめ，学習指導にも直結する「話す力」や「聞く力」の向上があらゆる教育活動に組み込まれている。それに伴うプレゼンテーション能力の高さは，日本の学校の子供たちと比べても目を見張るものがあった。

（２）国際理解教育推進プロジェクト

在外教育施設としての使命は，保護者のニーズに応えられる学力向上を図ることであるが，もう一つは，在外にあることの意義と地の利を生かした現地理解教育をいかに，意図的・計画的・効率的に実践するかである。そこで，学校の財産として現にある行事等を国際理解教育プロジェクトにより，次のように整理し推進していった。

職員の中では「ドイツ・ベルリンだからこそできること」が合言葉となった。

学期	現地理解活動（行事・各教科等）	交流活動	英会話・ドイツ語
留意事項	・ベルリンだからこそできる行事，対外活動に積極的に参加していく。 ・活動にあたっては，必ず事前学習、事前準備を行って臨む。事後活動では様々な方法で表現させ，わかったことを「伝える」場を設定する。	・ドイツを理解することに加え，日本を知ってもらう機会としたい。 ・「地の利」を生かし，隣接校および姉妹校との関わりを深めていく。	・習熟度別クラス編成をもとにその発達段階・能力に応じた力を高めていく。 ・言語だけではない，積極的なコミュニケーション能力や表現力の育成。
一学期	・歓迎遠足（ベルリン動物園） ・運動会（姉妹校　隣接校　日本語補習校を招待） ・夏季学校	・コンラード校学校祭への参加 ・独日協会夏祭りへの参加	・授業参観
二学期	・修学旅行（ドイツ国内） ・秋の遠足 ・ＢＳＲごみ処理場，消防署，上下水道見学 ・学校祭（コンラード校との合同合唱など） ・オペラワークショップ	・コンラード校との体験授業交流 ・学校祭コンラード校，姉妹校への出張公演 ・姉妹校でのクリスマス飾りつけ ・クリスマスコンサート	・学校祭へ向けたドイツ語劇の練習 ・姉妹校での英語授業の参加
三学期	・ベルリンフィルハーモニー見学 ・スケート教室 ・学習発表会	・日本語補習校でのお正月会に参加	

３．持続可能な社会／ＥＳＤの取り組み

（１）概要

「ＥＳＤ持続可能な開発のための教育」を考えるにあたって，ドイツは世界でもその先端をいく国であり，その地の利を生かしつつ理科・環境教育と言う視点から３年間実践を積み重ねてきた。

また任期中の2014年はＥＳＤ10年総括の年であり，名古屋で国際会議も開かれた。そういった意味でも，実践には良い節目であったと押さえている。

（２）実践内容

ベルリン日本人国際学校では総合的な学習を「ヴァンゼーツァイト　※ヴァンゼーとは日本人学

校のある地域。ツァイトとはドイツ語で時間」と名付け，ドイツ・ベルリンにこだわった探究活動を推進している。中学部の生徒は少人数の特長を生かし，積極的に施設訪問や体験活動に取り組んできた。そんな中で，中３理科にある単元「エネルギー」「環境」という観点を通して，２グループが次のようなテーマを設定した。

グループＡ　ドイツ・ベルリンの森林維持について

グループＢ　ＢＳＲ社リサイクル文化と循環型社会

生徒達は，実際に訪問活動や聞き取り調査を通して教師側の予想以上に精力的に活動した。特に，一つのテーマから自ら課題や疑問点を掘り下げていくところは大変評価できるものであった。

①グループＡ　ドイツ・ベルリンの森林維持について

動機づけとして，７月初旬に行われる全校行事「夏季学校」の中学生・学級活動において，ヴァンゼー地区の森林サイクリングを実施した。初夏のすがすがしい風と，青々とした森の中を自転車で走る生徒達にはまさに,「森林浴」であった。引率として参加した私も，ドイツ人の森を大切に思う生活の意味を深く実感できる活動であった。これを通して，森と調和したドイツの文化とその維持について調査・探究活動を実施した。

森のサイクリングのようす

Förster／フォエスターという森の管理者訪問を通して，ドイツ人の森に対する考え方や生活・文化の一部になっているということを生徒達は強く実感したようである。また，日本にもある森林保全の在り方にも興味を持つことができた。

◎生徒のプレゼンテーション発表内容をうけて

ＦＳＣマーク

日本とドイツの森林面積は，ドイツ１１０７，６万ｈａ（国土の３１．７％）日本２５１０万ｈａ（国土の６６％）で意外にも日本の方が多いということが分かった。それにも関わらず，私たち日本人がそれを実感できないのは，ドイツ人のように「森と調和」した生活でないからだろう。ドイツ人は休日には森を散歩したり，森で遊んだりしている。それはまさに生活の一部になっている。

また，ドイツ人の子供たちの将来なりたい職業の上位に、Förster／フォエスターが挙げられていることから見ても，森を大切に思う文化が幼少期から育っているということが分かる。

次にＦＳＣについてである。ＦＳＣとは木を伐採する際に，全森林面積の１０％は残しその条件を満たした森の木材しか使わないという考え方のことである。それを知ると，私たちが使う紙（封筒やノート等）にはＦＳＣマークが沢山あることが分かった。またそれは，日本でも見ることができる。ドイツの森を大切にしようとするロゴが，遠く日本まで広がっていることが生徒も私も驚きであった

また外来種の木々の除去対策として，馬に引き抜かせ且つそれを馬の食糧にしているというユニークな取り組みも知ることができた。それは，いかにも循環型社会を自負するドイツらしい取

り組みとして非常に関心を抱くものであった。
　またエネルギー面でも，できる限り自給していこうとする動きもある。林業では出てくる残材を薪やチップにして，暖房用の燃料に利用したりしている。またこのような動きは，地方の村や街自体の取り組みとして行われているという。

ドイツ人たちにとってまさに「生活の一部」にのっている身近な森。生徒達は，情報や新しい文化に目ざとい日本の価値観とは違う，自然と調和したドイツ文化の良さを認識したようである。日常から身近に接している森や木々を，更に大事にしていこうとする態度が養われたのではないだろうか。

◎ＥＳＤとの関連
　持続可能な社会における森林の役割は以下のように考えた。
・森林の持つ多面性が，持続可能な社会における幅広い役割につながる。
・環境を保ち改善することで，温暖化や生物多様性にも結び付く。
・木材やバイオマスエネルギー等の資源を供給する。
・人を育む。時として森は，心を浄化し持続可能な社会の担い手を育てるのではないだろうか。
　ドイツでは，環境教育や自然教育がとてもさかんで，学校の授業の一環としても森を管理している行政官に森を案内してもらったり，20年前からは「森の幼稚園」たるものも存在するという。そこでは，森の中にあるいろいろなものを使い，五感で自然を体験しながら自然に対する知識だけでなく，運動能力やチームワークを通した社会的な能力等も身につけることができる。そしてそれは，幼いころから自然に触れることで，自然への愛情もいっそう湧いてくるではないだろうか。ドイツにおける森林維持の文化が，決して感覚的や一過性のものではなく，長い歴史としっかりとした理論に基づいたものであるということを深く認識できた。
　日本にも，大切にすべき山森や里山の文化が多々存在する。それを持続可能な社会へ生かしていくには，結局はどのような「教育」を行っていけるのかということである。

②グループＢ　ＢＳＲ社リサイクル文化と循環型社会について
　ドイツにはＰｆａｎｄ（プァンド）という生活文化がある。簡単に言うとリサイクル文化が生活の中に根づいているということ。ペットボトル，缶，瓶のほとんどにPfand マークが付いてあり，ペットボトルや缶，瓶の飲み物を購入するときは容器の「デポジット代」が価格に上乗せされる。（ペットボトルは＋0.25€，瓶は+0.08€）そして使い終わったあと回収ボックスに入れると，その「デポジット代」代が戻ってくるというシステム。よってドイツの瓶やペットボトルは，日本のようにきれいではなく傷が目立つものが多い。
　生徒達は，日常生活の中で実感しやすいこの文化を通して，ドイツのリサイクルセンター（ＢＳＲ社）訪問を計画した。当初，３０分のガイドツアーの予定であったが，大幅に時間も内容も充実し１時間半にわたって興味ある説明やリサイクルの現場を学習することができた。ＢＳＲというドイツ全土に展開するリサイク

ペットボトル・ビン回収機、スーパーには必ず設置。テポジット料金が割引される

ルゴミ処理施設は，ベルリン市内に１７か所ある。ベルリン日本人学校でも，年度の変わり目に校内で不要な物を廃棄するために職員で利用している。

◎生徒のプレゼンテーション発表内容をうけて

まず生徒達が，最も関心を持ったことはバイマスエネルギーである。ベルリンは大都市でありながら，街中に緑があふれている。日本人学校の敷地内も，夏は青々と木々の緑に囲まれ，秋はまるで絨毯のように美しく紅葉した落ち葉に覆われる。中学生ともなれば，それらがある程度のエネルギーになるとは予備知識として持っていただろうが、訪問学習を通してＢＳＲ社の予想以上の合理的な取り組みに生徒達は非常に驚いたようすだった。

ベルリン市内だけでも落ち葉が100万トンにおよぶ。それらはすべて天然ガスや肥料として再利用されると言う。また250万トンにおよぶ小枝は，すべてが圧縮されＢＳＲ社のゴミ回収車のガソリンに変わる。落ち葉だけでなく、折れた小枝までがリサイクルにまわされているというドイツの徹底ぶりは称賛に値するものであった。　また，廃棄タイヤが運動シューズのゴム底やマラソン用のランニングコースに使われている点も，新たな発見であった。

そして何と言ってもリデュース・リユース・リサイクルという教科書に出てくる３Ｒについてである。ドイツでは日本のこの３Ｒに加えて，もう一つのＲリフューズがあり４Ｒを推進している。この徹底ぶりは生徒も私も，日頃のベルリンでの生活を顧みると大いに納得することができた。

Reduse(リデュース＝減らす)	Reuse(リユース＝再使用)
Recycle（リサイクル＝再利用）	Refuse(リフューズ＝断る)

Refuseは，レジ袋は要らない。過剰包装はしないいらない。ゴミになるものをもらわないことである。

「リデュース・リユース・リフューズ」まずこの３つが前提で，それでも出てくるゴミをリサイクルするのが，ドイツの取り組みなのである。これを４Ｒ（４アール）と呼んでいる。生徒達は，「循環型社会」という言葉以上に，一個人の考え方こそが持続可能な社会へと繋がっていくのだということを実感したようである。

◎ＥＳＤとの関連

日本において「リサイクル」というと当然のごとく良いこと，としてとらえられている。しかし，ドイツでは若干そのニュアンスは違うようである。それは，リサイクルがいけないということではない。リサイクルはもちろん大切である。けれども、エネルギーがたくさんかかるということを覚えておかなければならないのだ。問題は，日本では「リサイクは素晴らしい」という考えしかないことである。環境先進国ドイツでは，ゴミは日本の１０分の１といわれている。リユース　リデュース　リフューズが中心となっているのだろう。

このテーマに取り組んだ生徒達は，循環型社会だけでは解決できない，ゴミ問題ひいて

は「持続可能な社会」の奥深さを認識できたのではないだろうか。日本へ帰国した後も，自分でできることを探していきたいと語った生徒の感想が大きな成果であると振り返ることができる。また指導者である私自身も，理科や技術科で行われる「ＥＳＤ持続可能な開発のための教育」において，思考や指導方法の広がりを実感することができた。

プレゼンテーションのようす

（３）実践をふりかえって

下に，生徒達のＥＳＤ活動の感想の一部を記す。

・私はどのような取り組みでも，日本が一番進んでいると思っていました。でも今回ドイツの現状を知って，日本もまだまだ見習うことが多々あるんだということに気付きました。例えば包装など，日本の過剰なサービスも問題があるのではないでしょうか。
・「森について学ぶ」ということ自体，日本ではあまりないことだったので単純に面白かったです。帰国したとき，私の周りにある森や自然をしっかりと見つめ直してみたいです。

ドイツ・ベルリンは，ドイツ人・白人だけでなく中東・アジア・アフリカ系などヨーロッパの中でも屈指の多文化共生を象徴する街である。そのような様々な文化・考えが混在する中で，この国が確立している持続可能な社会への取り組みが，人々の中にしっかりと浸透していることに感心させられた３年間であった。

また，昨今の難民問題に象徴されるように，ドイツの人達はとても優しく親切である。そういった面からも，ハード面として国や自治体がつくる循環型のシステムだけでなくソフト面として，ドイツに住む人達の心遣いというものも忘れてはならない。ハード面とソフト面が融合して初めて，未来永劫な「持続可能な社会」が実現していくのではないだろうか。

４．ドイツの教育システム

（１）就学前教育

就学前教育は，３～５歳児を対象に，幼稚園で行われる。

（２）義務教育

義務教育は，６～15 歳の９年である（一部の州では 10 年）。

また，義務教育修了後に就職し見習いとして職業訓練を受ける者は，通常３年間，週１～２日程度職業学校に通うことが義務とされている（職業学校就学義務）。

（３）初等教育

初等教育は，基礎学校において６歳から４年間（一部の州では６年間）行われる。

（４）中等教育　*～ドイツの子どもたちは１０歳で人生が決まる！？～*

中等教育は１０歳より，能力・適正に応じて，主に３種類の学校で行われている。

ハウプトシューレ：５年制。卒業後に就職して職業訓練を受ける者が主に就学する。
実科学校：６年制。卒業後に職業教育学校に進む者や中級の職に就く者が主に就学する。
ギムナジウム：８年制または９年制。大学進学希望者が主に就学する。

◎ドイツと日本の教育を比べると

ドイツ／多様性 ⟷ 日本／統一性

ドイツは，早い段階（小学校４年）から各自の適性や能力に応じた教育を推進していることが分かる。それは，個人の問題だけでなく，国家レベルの財産になっていくのではないだろうか。早期からの専門的な教育の徹底は，各分野におけるスペシャリスト（マイスター）を生んでいく。　その反面，移民・難民の子どもたちのようにドイツ語力が大きな壁となったり，幼少期や思春期では分からない，個人のポテンシャルを発揮・開発されないまま進路が決まってしまうという問題も推測できる。そこにはドイツ・日本ともに双方の教育システムの良さがあった。

（５）高等教育

高等教育とは，大学と高等専門学校（専門大学とも訳す）で行われる。大学入学に際して，ギムナジウム修了資格であり大学入学資格でもあるアビトゥアを取得しなければならない。

（６）ＰＩＳＡショックを受けて

国際学習到達度調査（読解・数学リテラシー　科学的リテラシー）いわゆるＰＩＳＡにおける，２０００年のドイツの子どもたちの散々たる結果に，国／連邦政府は大きなショックを受けることになった。これを契機に，教育内容や教育水準などにおける州間格差を解消すべく，０３年から各学校教育段階最終学年の主要教科について，全国共通のスタンダードが開発された。また，移民・難民の子供達に対するドイツ語教育の徹底や学力保障なども組織的に行われている。

５．生活面　～受け入れて　受け入れられた３年間～

住居（築１００年）

派遣前，ＪＩＣＡ帯広の開発教育プログラムの推進委員として，途上国の現場を教材として扱うことが多かった。よって，ヨーロッパ・ＥＵの盟主ドイツ派遣と決まったとき，日本と変わらない価値観と生活が待っていると思い込んでいた。しかし，それは大きな間違いであった。治安や衣食住は全く問題ないが，国民性はもとより各公共サービス等，決め細かい日本との違いを痛いほど認識することになる。現地に在留の方のお言葉に「１年目は目が慣れる　２年目は耳が慣れる　３年目は口が慣れる」というものがあった。まさにその通りで，年々ドイツをそしてドイツの人々を快く感じ，受け入れていく自分がいた。それと共に，地元ベルリンのバスケットチームに入ったり，各種イベントに参加することで，この国に受け入れられていったような気がする。しかし，それは海外に限ったことではなく，日本社会においても同じことが言えるのではないだろうか？３年間，本当に素晴らしい時間を過ごさせてもらった。お金には替えられない，貴重な人生の宝物となる経験である。ドイツ・ベルリンでの，沢山の方々との「出会い」に**Vielen Dank！**

所属したバスケチーム

2014 サッカーW杯ドイツ優勝